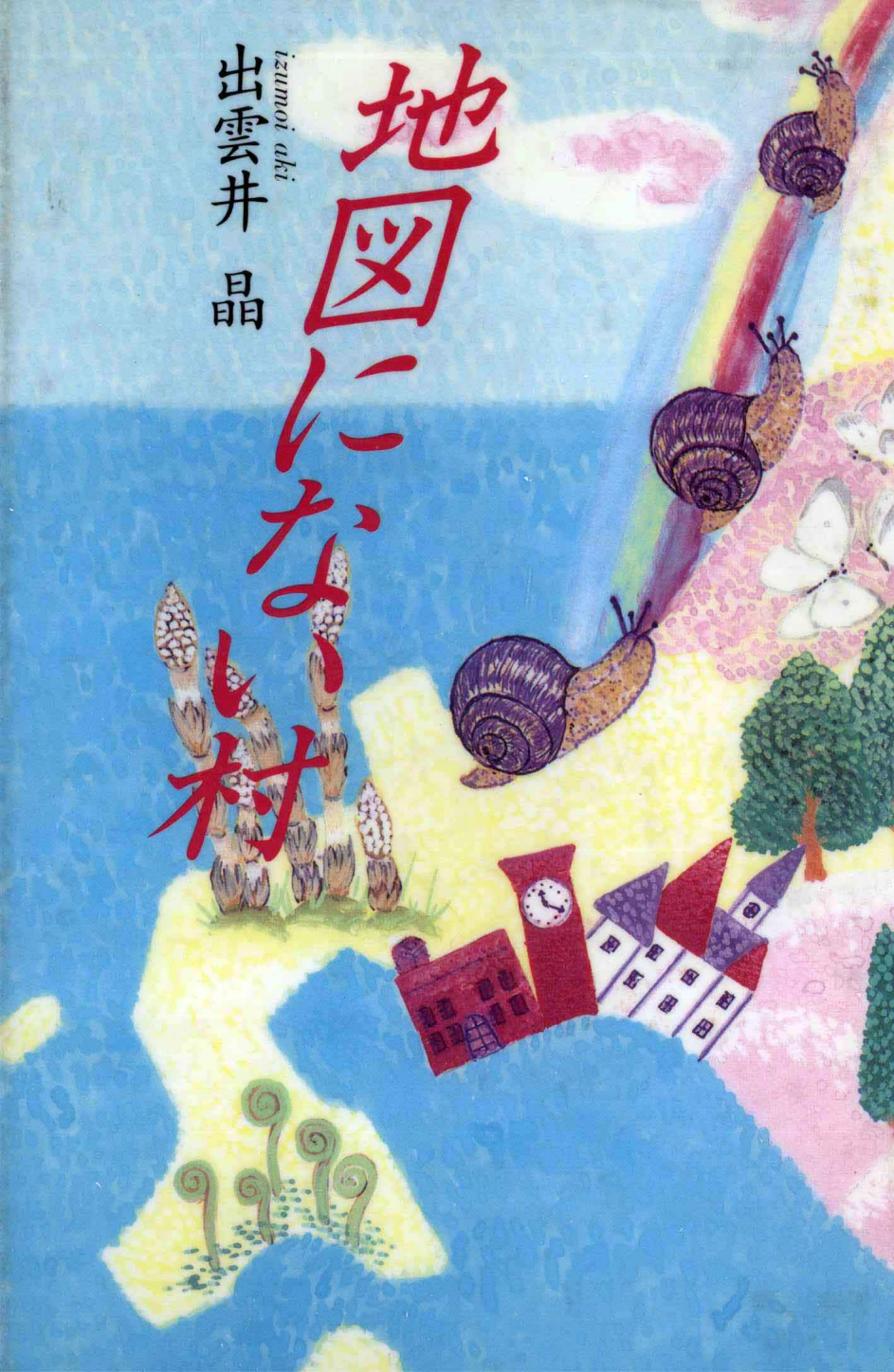


出雲井 晶
izumoi aki

地図にな ない村



地図
にない村

izumi ari
出雲井 晶

日本
教文社

出雲井 晶

作家。処女作『花かげの詩』（中央公論社）
の他同社から『華やぎの糸』、女流文学賞受
賞作品『春の皇后』（サンケイ出版）、『虹の
家』（日本教文社）など多数の作品がある。
文学博士（米国）。日本画家。

地図にない村

定価 一〇〇円

昭和63年6月20日初版発行

著者 出雲井 晶

〈検印省略〉

発行者 中島省治

発行所 日本教文社

〒107 東京都港区赤坂9-6-44

TEL (03) 401-9111

振替 東京 4-55519 番

© Aki, Izumoi, 1988

Printed in Japan

乱丁・落丁はお取り替えます。

印刷 飯島印刷
製本 凸版製本

ISBN4-531-06187-X

地図にない村
目次

1 プロローグ

「おしまコロニーゆうあいの郷」との出あい 9／障害者を愛する夫をたすけ続けた妻とは 15／目のやさしい大男 17／笑がおの美しい人びと 20／今、街のなかでは 24

2 保育園開設まで

博愛を思慕する青年 26／運命の出あいと別れ 30／久遠の伴侶、光 35／かぼちゃの種と保育園 39

3 障害をもつ子らとの出あい

病氣と一平のこと 43／父の教え 48／精神薄弱児者との出発 52／社会福祉法人、「侑愛会」の誕生 56

4 地図にない村「おしまコロニー」誕生

鐘の音わたる丘 63／「おしま学園」開園 72／只今、入浴中 76／三郎のトイレ奮戦記 77

5 おしま学園と学校教育との連繫

あつい希い、この子らにも義務教育を 81／一人ひとりと
の肌のふれあいと、その記録 83／補聴器をつかいだした
子の記録 93／子らの文集「地図にない村で」 96

6 解放された自閉症児施設

自閉症とは 102／第二おしま学園の治療教育の実践 105

ゆうあい養護学校高等部 114

7 新生園（男子成人施設）

住まいも手造りで 116／トラピストから牛の贈りもの 117
理想郷着々：親もとへ手紙をかくまでに 123／言葉をと
もどした若ものの記録 128／豚の出産 131／町のなかでの
実習へ 132

8 明生園（女子成人施設）

- 入園者のプロフィール抄 137／お茶会・パン工場・ゆうあ
い人形 143／のぞみ寮と、あいがも飼育班と 147／明生園
指導員の一園生観察記録 152／クリーニング班にきて 154
居宅訓練 156

9 実社会での自立

- 職場実習に町へ出て、就労へ 159／はまなす会 165／函館
市内にも更生施設をつくる 168／問題児とのとりくみ 173
小規模作業所 175／普通の生活を獲得する 177／狂乱の心
いまは消えて 181

10 精神遅滞者の性と結婚

- 精神遅滞者の性について 185／結婚 188／高齢者施設、
“侑愛荘” 199／侑愛荘のソッカネおじさん 202／ユーモラ
スな夫婦 204

11 地域の早期療育にとりくむ

- 母子訓練センター 206／お母さんたちの声 208／施設とカリキュラム 211／つくしんぼ学級 211／地域療育センター 214

12 おしまコロニー年間行事あれこれ

- ある年の年間行事予定 218／コロニー祭 220／おしまコロニー合同運動会 221／雪まつり 222／東南アジア研修生を迎えて 224／ヴァンルニ・カムクリス（タイ国立ラジャスカル精神科病院院長）からの手紙 225

13 エピローグ 228

註——本書は、おしまコロニーの事実に基づいたルポルタージュであるが、
大場茂俊、光以外のコロニー関係職員、園生はすべて仮名にした——著者

装画・カット

写真提供

出雲井 晶

光定 えり

北海道アート写真
ヤスダデザイン

地図にない村

I プロローグ



「おしまコロニーゆうあいの郷^{さと}との出あい娘^{むすめ}があちらに住んでいるので、友だちがよく北海道へでかけた。昨年^{さくねん}の春また、「ちょっと出かけてきます」という。

「いいわねえ、北海道の四季の移りかわりを見られるなんて、最高の仕合わせよ」

と、私^{わたし}があまりにも羨^{うらやま}ましい顔をしたからだろう、友だちの瑞子^{みづこ}は、

「今だから笑って話せますがね、美和子夫婦は息子の入っているコロニーのそばに住みたいばかりに、勤めていた会社もやめてあちらに引越していったのですよ」と、はじめて打ちあけた。

「孫^{ひまご}の行彦^{ゆきひこ}が自閉症児^{ひまご}でね」

「自閉症？」と聞き返した私は、家の近くの電柱のはり紙を思い出した。

“自閉症やダウン症のお子さんでお悩みの方のご相談に応じます”

はり紙が目に入るたびに、自閉症、ダウン症って、どんな病気なのだろう。難しい病気のようにだが、と思っていた。

「行彦が、忘れもしない三歳のこどもの日でした。うちへ連れてきて同い年の一と遊ばせようと思いました。ところが少しも遊ばない。口にボロボロになったハンカチをくわえたまま、私が話しかけても全く知らんぷりで反応がないの。おかしいよ、行彦、いちど耳の検査してもらったら、と言ったのが障害に気づいた最初でした。それから、あっちのお医者、こっちの病院と、どれほど回り歩いたか。おそらく良いといわれるところは全国まわったと言っても、言いすぎじゃないでしょう」

ふっと私はその時、思いました。

「たしか、小さいのに英語が得意だってお孫さんの話、いつか聞いたでしょ。あのお子さんが行彦君じゃなかった？」

「それが得意っていうんじゃないの。今考えると、それしか言えなかったのよ」

「何が問題なの、わからないわ」

「英語は教育テレビか何かでおぼえたのでしょうね。例えば、物をかぞえるのはワン、ツウ、スリーって英語でかぞえます。ところが日本語ではぜったい駄目。」

「……」

「困ったのは、トイレでのお尻の後しまつが学校へ行きだしても出来なかった。暑くなって、冬

のふとんを涼しいのに替えてやろうとするでしょ、どうしても厚い冬ぶとんを離そうとしない。隠してもさがしだして、たらたら汗を流してでも厚いふとんをかぶって寝ないとおさまらない。隠して見つからないとパニックをおこす。娘はふり回されて、へとへとに疲れきっていた。その時、聞いたらしいの」

瑞子の顔がなごんだ。

「親身に面倒みてくれて、一人ひとりに合った指導をしてくれる施設があるって。美和子は最初、本気にしませんでした。さんさんショッピングして回ったあげくでしたから」

「ショッピング？」

「良いといわれるお医者や医療機関をあさり歩くことなの。でも半信半疑ながら出かけました。入園した幼稚園からは断られる。小学校に入ってから先生は暗かんに、登校させるなって様子で、学校へも行っていない時期でした。娘は、この子を抱いてビルの上から飛びおれば楽になるって、高いビルばかり見上げて歩いている、などと口走るようになっていた時でしたから」

私は相づちのことばを見出せなかった。

「娘も孫もふびんで。でもどう仕様もない。そんなことをしたら自分の子といっても人殺しだよ。死んでも地獄行きで楽になれやしないって、分かりきったことを言い聞かすだけで、何の力にもなってやれない。発作的に子を殺して死にはしまいかと、息がつまるような毎日でした」

「知らなかった！」

「いっそ、先のみじかい私が孫を道づれにして死んでやれば美和子を救ってやれるのではないかしらと、こちらまで狂ったようなことを考えたりもしました」

「その半信半疑で出かけられた先が北海道の施設だったわけ？」

「そう、おしまコロニーだったの。二週間ほどして帰ってきた美和子が、やっと行彦にも安住の地がみつかったって。行彦が生まれてから消えていた笑がおを、娘は十数年ぶりに見せましてね。いっしょに泣いてしまいましたよ」

「そんな苦勞がお有りになったの」

「休みには帰ってくる行彦を近くで待つてやりたいし、施設のお手つだいもしたいって、とうとう越していったのです。でも娘もすっかり明るく逞しくなりました。このごろでは、知恵おくれの子であろうが、どんな呆け老人だろうが、人間の尊厳は変わらないんだって、私にお説教しますのよ」

瑞子は明るく笑って言った。

「今では職員の方も三百人ちかい大世帯らしいです。が、最初は今の理事長ご夫妻が私財を投げうって始められたのだそうです。トラピストの鐘の音が聞こえるところに、障害を負った人たちのための楽園を創ってあげたい、それがご夫妻の夢だったそうです」

「世の中にはなんと奇特定の方もいらっしゃるものね」

口では感心しながら心の中につぶやくものがあつた。『人間愛』を言うは易しい。精神遲滯者のための理想郷づくりに情熱をもし生涯をかける！ 実にすばらしいことだ。

しかし毎日、テレビが映し出す人世の縮図は、権力、地位、金だと、すさまじい。自分さえ良ければ、自分の家族さえ豊かで仕合わせであれば良い、が当たり前のような今の世の中ではないか。ほんとうに、そんなすがすがしい人たちがいるのだろうか。いるのであれば、ぜひ会ってみた。その「おしまコロニー」とやらをこの目で見せてもらいたい。

私の身ぢかにも重い脳性小児麻痺のむすめを抱えた家庭がある。三十をすぎてもお人形のように小さな寝たきりの、そのむすめを慈しんで、一切苦悩を語ろうとはせず明るく生きている。

老いてゆく我が身と、むすめの行く末を思いあわせる時、深刻に悩むこともあるであろう。この子を残しては死ねない。自分が死ぬときは連れてでもいいきたい。だが自分の手でそんなことなど出来はしないと、何度か思いを歩きつもとどりつさせたこともあるだろうに。心のひだに畳みこんで悩みをのぞかせない。が、そのむすめの母親は年を経るごとに、みごとにその悩みを昇華させていく。真の賢さ、愛ふかさが物の考え方ことばの端ばしに滲む。のはほんと過ごしたものは足もとにも及ばないと、おのずと頭が下がる。

「親亡きあと、この子はどうして生きていくだろうか」ということが、心身障害児をもつ親すべての究極の、切実な想いではないだろうか。希わくば、自分の亡きあと自分が見守ってやっていた時と同じように平穩に生きつづけて、寿命をまっとうしてほしい。これこそが最大の、最後の、障害児の親たちの悲痛なさけびではなからうか。

施設の規模の大きさとか、設備のよさとかは、それにこしたことはない。が、二のつぎ三のつぎのことだろう。心身に不自由をもつ子を見守り介添えしてくれる人びとが、どれほど親とおな

じ気持ちで根氣づよく、思いやり深く見守ってくれるだろうか。どれほど心のきずなを太くかよいあわせて、子どもの気持ちを吸んでやってくれるだろうか。障害の重さによって、千差万別の対処のしかたがのぞまれるが、どこまで血のかよった適切な世話をしてくれるだろうか、不安は尽きることがなくて当然だ。

何にでも相性がある。Aの人にはどれほど良くても、Bとは反^{そり}があわぬこともある。美和子さん親子とおしまコロニーとは性があったのだろう。だが深刻な悩みをもった親がそれほど信頼する施設であれば、親の悩みを掬^{すく}いあげてくれた事だけは間違いない。

「明けても暮れても、障害をもつ人たちのことだけを考え続ける。そのためだけに働き続けることが出来れば、どんなに素晴らしいか。けれど私にはとうてい出来ない。そのご夫婦ってすごい方だと思う」

私は、本音を言わずにはおれなかった。

沢ひとつ、へだてたところにトラピストのある丘。朝な夕なに澄んだ鐘の音が谷をわたってコロニーの郷^{きょう}に広がっていくという。はまなすの花が咲いて野いちごの赤い実がゆれる。コロニーの人たちが耕して作る畑が続く。その向こうで乳牛が草をたべている。赤い屋根の学校や家が並んだ、のどかな別天地。

瑞子の手をきいていらい私は、地図にはないが、たしかに存在する。おしまコロニーゆうあいの郷^{きょう}が忘れられなくなった。